

第十三回福崎町柳田國男ふるさと賞 中学生の部 受賞

結婚式のしりとりかわりどしり

福崎東中学校二年 井藤 咲江



◆動機

大河ドラマを見たり、最近のドラマを見たりしていると、結婚式のシーンが出てくることがあります。すると、結婚式のかたちが全然違うことにびっくりします。そこで、この機会に結婚式の移り変わりを調べ、そこから時代の変化を見つめたいと思いました。また、今を生きている私たちの結婚への価値観も探ってみようと思います。調査を進めることにしました。

◆結婚式の移り変わり

日本の結婚の歴史をまずは調べました。

(参考文献: <https://bridal-oshigoto.com/>)

◆古代

古代の日本人は性に対しておおらかで開放的であり、恋愛と結婚の境は明確ではなく特別な儀礼も行われていませんでした。結婚に近いものといえば、男性が夜に女性の所に忍び込み、探し当て、相手が許せばOKという「妻問婚」がありました。

〈古事記より〉

七二二年に完成した日本最古の歴史書『古事記』の中に日本の誕生はイザナギノミコトとイザナミノミコトの結婚によるところから始まるそうです。天之御柱をイザナギが左から、イザナミが右から回って結ばれたとされ、それが結婚の起源とされています。

そういえば、おひな様もおだいろ様が左、おひな様が右にかざります。結婚式の席も左が新郎で右が新婦なのは、こんなところから由来があるのかもしれないと思います。

◆平安時代(8〜12世紀)

自由恋愛の「妻問婚」から女性の親が婿を決定する「婿取婚」へ変わります。貴族社会では男性の忍び通いが三晩続くと結婚の意思があるとみなされ、三日目の夜には餅を食べるで祝う「三日夜の餅の儀」が行われました。夜が明けると「ところあらわし」と呼ばれる祝宴が催され、これをもって結婚の成立とされています。

〈引き出物の由来〉

引き出物の語源は「引き出す」で、このころに祝宴に招いた客に、帰りに馬を引き出して贈ったことが始まりとされています。

貴族の人は祝宴を行っていたけれど、おそらく一般の人はそんなことはしていなかったのではないかと思います。

◆鎌倉・室町時代(12〜16世紀)

封建的な父権優先型の社会になり、男性の家に女性を迎え入れる「嫁取婚」が広まりました。女性は生家を離れ男性の家に入るといって、近代の結婚に近い形が生まれました。結婚にまつわる儀礼(盃事、祈祷、親戚や知人を招く祝宴)が始まります。

〈結納の起源〉

婚約の儀式である結納は「納采」と呼ばれ、皇室の儀式からきています。

男性が女性より上にたっているような気がしました。

ふわっとしていた結婚が儀式のようになってきています。

〈三献の偽〉

約束を固めるための杯をとりかわして、出席者全員が注がれた酒を飲んでいました。三献とは、一献につき大、中、小の杯で一杯ずつ酒をすすめ、二献、三献と全部で9杯の酒を飲む儀礼のことです。酒の肴がある時は、一献↓打ちあわび、二献↓かち栗、三献↓昆布でした。現代でも神前式で行われる三三九度は、これが由来しているそうです。

◆江戸時代(17〜19世紀)

庶民の中でも見合いや結婚の儀礼が行われ始めます。武士は親が相手を選び、町人は見合いをして縁組みをしていました。子供のうちから親同士が婚約を結ぶ許嫁の風習があったのもこの時代です。

〈輿入れ〉

嫁の乗った輿を婿の家に担ぎ入れ

る「輿入れ」が儀式の大事な要素となっていました。武家や裕福な商家などでは、着飾った花嫁とともに多くの嫁入り道具を行列して運び込む「嫁入り行列」が華やかに行われるようにもなってきました。豪華絢爛な嫁入り行列として有名になるのは、一六二〇年（元和6年）に行われた2代将軍秀忠の娘和子の皇室への嫁入り（入内の儀）で、和子は豪華な牛車（ぎしや）に乗り、諸大名や公家も参列したそうです。花嫁道具を運ぶだけでなく数千人を連ねる大行列であったといわれています。

〈江戸庶民の結婚式〉

裕福な商家などでは花嫁は振袖や留袖、花婿は紋付羽織袴を着用し嫁入り行列なども行われるようになりましたが、江戸庶民の場合は店請人（たなうけびと）つまり借家の保証人などに仲人を頼み、形だけの三三九度をすませて料理と酒で祝うという簡素な婚礼が多くみられるそうです。特別な衣装ではなく、普段着で行われることも多かったといえます。

〈婚礼衣装〉

江戸中期以降の武家の花嫁は、白無垢を着て、髪は文金高島田に結い、綿帽子をかぶるのが一般的でした。白無垢とは打掛、帯、綿帽子をはじめ、下着から小物まですべて白一色

に統一したものです。文金高島田は、男性に流行していた分金風の髪型を女性向けに優美にアレンジしたものだそうです。元文年間（一七三六〜四〇）に鑄造された金貨「分金」が流通し始めたころだったのでこの名がついたといわれています。花婿は袴（かみしも）（上下とも書く）を着るのが一般的でした。

〈綿帽子と角隠し〉

綿帽子は、頭髪を袋状の白絹ですっぽりおおう形式で、白無垢だけにあわせるものだそうです。花婿以外に顔を見せないという意味があるとされています。角隠しは、長方形の白絹を髪に留められるようにしたもので、本来は色打掛と本振袖に合わせますが、白無垢につけることもあったそうです。角を隠して従順になるという意味があるとされています。

庶民では簡素なものだけど、特別な一日としてとらえられていたように思いました。裕福な家や身分がある家では、たくさんお金を使うしきたりもできていくように思いました。さまざま商売が増えたことが感じられます。

◆明治時代（一八六八〜一九二二）

欧米文化が入ってきたことにより、日本でも結婚式に様式美を求めようになり、欧米の結婚式の流れを模して神社で儀式を行う「神前式」が生まれました。一般的に広まるきっかけは皇太子のロイヤルウェディングでした（神道式）。宮中で行われた翌年に、一般の人々を対象にした模擬神前式が行われました。式のあとに近くの帝国ホテルで披露宴が行われました。

歴史で勉強した文明開化があると思えました。

〈永島式結婚式〉

新しい結婚式のスタイルとして一九〇九年（明治42年）に行われた「永島式結婚式」は、「結婚式を荘厳かつ簡便に行いたい」と考案した出張型の神前式スタイルで、神主や巫女など神前式に必要な人材や道具一式を揃えて個人の家や会館などに出向いて行う新しい形も出てきています。

◆大正時代（一九一二〜一九二六）

大正時代になるとホテルや会館などでも行われるようになりました。結婚式と披露宴、ホテル内での美容

や写真館での撮影などを組み合わせ現在のホテルウェディングの原型が誕生しました。

◆昭和時代（一九二六〜一九八九）

神前式が隆盛を迎えるのは昭和20年代半ばからだそうです。第二次世界大戦が終わり戦後の結婚ブームが起けると、戦後民主主義と経済成長の波に乗り結婚式にも変化がみられるようになりました。結婚式専門の式場が次々とつくられ、それまで三三九度と親類縁者の祝宴を新郎の家で行っていた庶民の結婚式も、こうした結婚式場やホテル、会館などに場を移すようになります。戦前は一部の上流階級のものでしかなかった神前式も、広く一般庶民に普及していききました。

結婚式はすでにきだなあと思っている人が多かったので広まったんだと思います。そして、坂本龍馬はこんなところでも新しいことをしていると驚かされました。

〈新婚旅行の普及〉

坂本龍馬と妻のお龍が始めたとき、東京の新婚カップルが熱海や湯河原

に新婚旅行に出かけるようになった昭和の時代からだそうです。新婚旅行客の集中する下りの熱海行きは「新婚列車」とも呼ばれ、一九五九年(昭和34年)には同名の映画が上映されるほどメジャーな存在だったようです。

◆高度経済成長期(1970年頃)

- ・生活が豊かになり結婚式のスタイルも華やかになってきます。
- ・神前式が減少し、キリスト教式結婚式が主流に
- ・儀式はホテル内の神殿↓キリスト教教会と提携
- ・披露宴は宴会場↓チャペル(礼拝堂)で誓いの言葉を述べる
- ・花嫁は文金高島田に打掛↓白いウェディングドレスを着る

◆バブル期(1980年代)

結婚式への支出総額が増えました。新郎新婦がゴンドラやヘリコプターに乗って登場したり、レーザー光線やドライアイスを使用するといった大がかりな演出が話題になるなど、様々な結婚式のスタイルがありました。

ハテおぎんはあかこと思いました。

◆平成時代

(バブル崩壊〜オリジナル婚時代)

「自分たちらしさ」を追求する傾向が強くなり、オリジナルの演出や料理などが求められるようになりました。結婚式の会場もホテルや専門式場からレストラン、ゲストハウス、船上、ガーデンなどに拡大し、海外ウエディングや国内リゾートウエディングも人気。一方で結婚式にお金をかけないジミ婚も出てきます。結婚しても結婚式はしない、または少人数のパーティーなど、結婚式は両家ではなく自分たち主催で行う「披露露」↓「おもてなし型」へ。

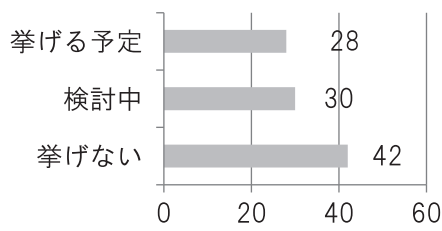
しきたりよりも自分たちの意見や考えを大切にしようとしているなあと思いました。

●令和の結婚観を調べよう

- ① インターネットで調べてみる
 - ② <https://www.kagann.com>
 - ③ <https://www.mynavi.jp>
- 現在の結婚式を挙げる割合と推移を調べました。

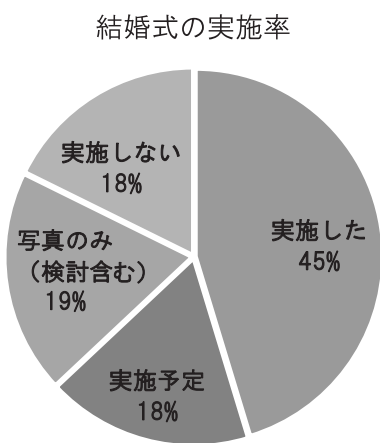
①より結婚前調査資料

Q. 結婚式は挙げますか?



最初は7割くらい挙げたい人だろうと思っていたけれど、挙げない、検討中という人全体で約7割を占めている結果を見て、挙げない人が思った以上に多くて驚きました。

②より結婚後調査資料



違う会社の調査ですが、結婚をした人の比率を見ると、結婚式を挙げ

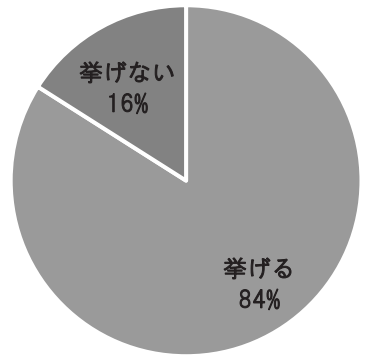
る予定の人は約3割だったけれど、実際に実施した人は約4.5割でした。実施予定も含むと約6割になります。減ってきているといいつつもスマー卜な形で簡単にでも結婚式をする人は少なくはありません。年代別に見ると、若い人ほど結婚式にこだわらない傾向があり、写真のみの人も多いようです。

②中学生の結婚式の意識を調べよう
中学生12才〜14才を対象にアンケートに協力してもらいました。そして、結果から見えてくることを考察しました。

③の結果を受けて若い人の方が結婚式にこだわらないなら、もっと若い中学生はもっとこだわらないという結果になると思われるので実際に調査しました。

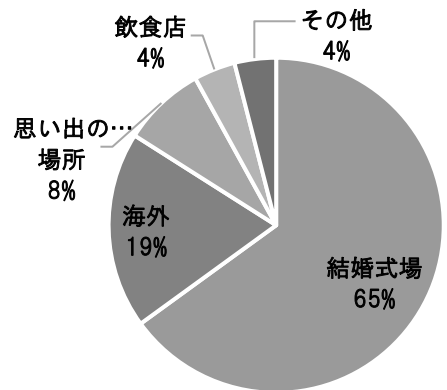
回答者 男・17人 女・15人

Q 1. 結婚式を挙げたい？



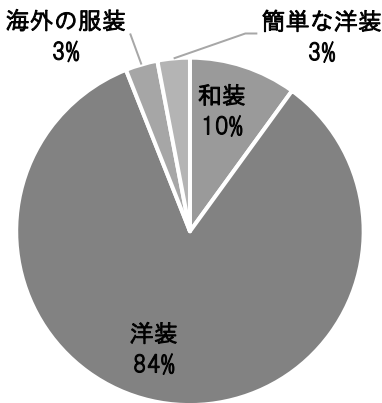
実際に調査をしたら、挙げたいという人が多いことが分かりました。挙げない人が多くてもおかしくないのに、中学生の場合は反対の結果になりました。それは、まだ金銭面の感覚があまりなかったり、テレビなどのいろんなことで結婚式にアコガレがあると考えられます。挙げない人は、お金やはずかしがりやなどの性格を理由にあげています。これからは少数派の意見が増えていくのかなあ…

Q 2. どこで結婚式をしたい？



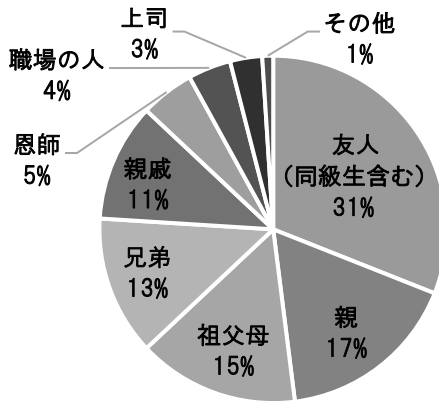
結婚式場が一番多いけれど、結婚式場以外の海外なども最近増えてきているし、結婚式場以外を足すと35%になります。このことから、いろんな結婚式のやりかたや、自分の思いにあわせて選ぶという人も多いと思います。

Q 3. どんな服でしたい？



親よりも友人（同級生含む）の方が多いことにおどろきました。中学生なのもあって、職場の人や上司が少なかったです。血族は半数を超えていることから親族を呼びたいという気持ちは少なからずあると思います。自分の身近な人だけでいいと思っっている人が多いことがわかります。

Q 4. 誰を呼びたい？



今はほとんどが洋装であることがわかります。和装へのアコガレが消えない人もいると思いました。海外の服や簡単な洋装がいいという意見もありました。それはあまり服装にこだわっていないからだと思いました。

〈全体をとおして〉

結婚に対して理想をもっていることがわかります。それぞれ結婚観を持っていることがわかります。

③ 20代の人にアンケートをお願いしました。

回答者 男・1名 女・2名

回答数が少ないのではつきり分かりません。けれど、結婚した足跡を残したいという気持ちは感じられました。フォトウエディングというのが回答にありました。聞き慣れない言葉だけれど、和装やウエディングドレスなどを着て写真だけ残すことです。式は挙げないけど、ふだん着ない服を着たいという気持ちがあるのかもしれない。

①②③より：令和の結婚観

自分たちにあった結婚の形を自分たちが主になって互いに相談して決めていくんだなと思いました。ハデもよし、地味もよし。大切なのは自分たちの考えだと思いました。ジェンダーフリーや同性婚、籍を入れない結婚など、考え方が固執していない令和のいい所が現れていると思います。

●福崎町の結婚式の移り変わりを探る
 いろんな年代の人が集まるところ
 でアンケートをお願いしました。

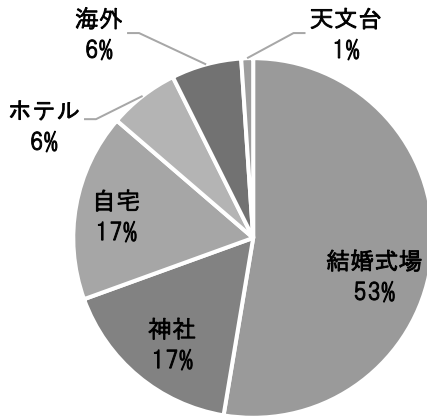
回答者 男…4名 女…8名

90代…1名 80代…2名 70代…1名
 60代…1名 40代…5名 30代…2名

Q1. 結婚式を挙げましたか？

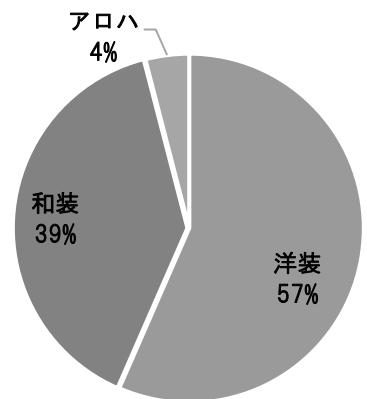
声をかけた人は全員結婚式を挙げた方ばかりでした。結婚式を挙げた人が非常に多かったことが考えられます。

Q2. 結婚式をした場所



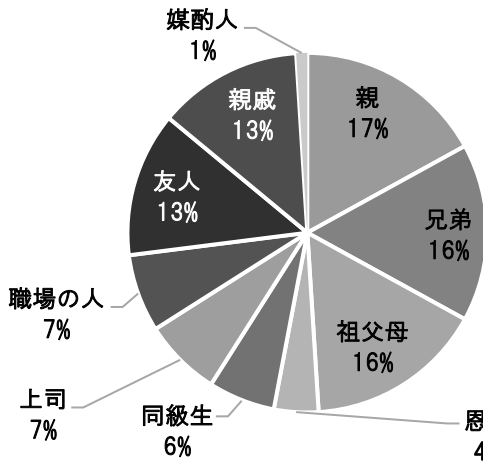
ほとんどが結婚式場のようと思いますが、年代でくると結婚式場や天文台や海外は40代の人が多く、ホテルは60代の人、神社は70代〜90代の人が多かったです。神社は熊野神社や鈴の森神社など近くの神社で行われたようです。

Q3. 結婚式のときの服装



式だけでなく披露宴もあったので、洋装も和装もチェックがはいる人が多かったですが、70代〜90代の人ほとんどが和装でした。ハワイでは正装がアロハシャツなので、アロハシャツを着たそうです(40代)

Q4. 結婚式に呼んだ人は誰ですか？



血縁者を呼んでいる人が多いです。

結婚式の参加者の多数は血縁者で占められていることがわかります。若い人(中学生や20代)に比べると職場関係や上司、恩師の存在も目立ちます。友人は控えめです。家同士のつながりや仕事場の関係を優先している時代を感じます。その他は媒酌人と呼ばれる人ですが、両家の間を取り持つ役割の人です。聞いたこともない言葉でびっくりしました。

さまざまな年代の人を調べること、結婚式の移り変わりで分かったことが福崎でもいえるんだなと思いました。

●大庄屋三木家の婚礼(江戸時代後期頃の福崎)

三木家とは、明暦元年(二六五五)飾磨から福崎町辻川の地に移り住み、姫路藩の大庄屋として地域の政治と文化の中心的存在だった家柄です。この三木家の婚礼についてまとめられた冊子があることを役場の人から教えてもらいました。江戸時代から明治の大庄屋の婚礼の様子がわかりました。

〈冠婚葬祭の時のみに使う部屋〉
 「役宅」
 自宅なのに家人ですら通常は使用

できませんでした。家なのに家の人がふだん使わない部屋を日当たりの良い南側にドーンともってくるのが不思議に思いました。四つも部屋を使って結婚式を行っていたことから三木家が大庄屋だなど思ったし、家で結婚式を行っていたことが分かりました。南側に部屋をとったのは、お客様を第一に考えていることだと思います。



「役所のみ」からみた「役宅」



特別展示パンフレット
 「三木家の婚礼」

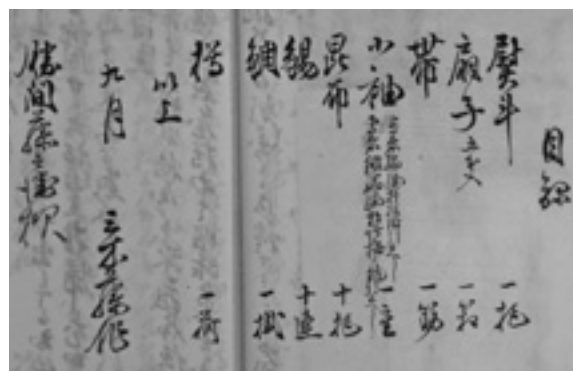


三木家7代当主通深初婚の記録
 (「三木家の婚礼」)

〈江戸後期の縁談から婚礼まで〉
 資料(『縁約一条諸控』)から、
 親が相手を選び、本人の意思はない
 ことがわかります。また、今では自
 分たちで用意するけど、全て周りの
 人が決めて準備していく様子が分か
 ります。日程までも本人以外が決め
 ていくことも驚きましたが、日にち

が都合で何回も変更されていくこと
 にも驚きました。
 前に調べたような結納という儀式
 もあります。そこでは三木家が大庄
 屋であることを感じる品物が送られ
 ていました。大坂から取り寄せてい
 ることから贈り物にもこだわりがあ
 ることがうかがえます。

髪斗	一 把
扇子五本入	一 箱
帯	一 筋
小袖 上着縮緬模様の引かへし 下着縮緬模様の引かへし	一 重
昆布	十 把
鯛	十 速
鯛	一 掛
樽	一 荷
以上	
九月	
勝間藤兵衛様	三木藤作



結納の品の目録
 (『縁約一条諸控』三木家資料)



婚礼衣装
 (明治30年ごろ 三木家資料)

花嫁の到着と祝言
 とても華やかな着物なのに、人に見せびらかすことなく結婚式をするのが今と違うと思いました。どうして立派な物を見せようとしなのだろう。そこには周りの目を気にせずに結婚式をしたかったのかもしれない。初めて結婚相手と会うのが結婚式なんて！
 びっくりしてしまいます。

〈江戸後期の婚礼の様子(当日)〉
 『三木通深後妻婚姻様記』より
 たくさんの人を呼んだり、手伝いする人も91人もいて驚きました。それに91人にねぎらいもすごく大変だと思いました。
 華道ではおもてなしの心があると
 いわれていますが、家での婚礼には
 細やかな心遣いを感じます。場面に
 合わせて飾りを変えるところが日本
 らしさだと思えます。

祝宴

結婚式とうって変わって祝宴は多人数でにぎやかに長時間することに驚きました。使われる食器の多くは赤と金色で、着物に似ています。めでたい色は赤というのは、昔からなんだなと思いました。

大きな桶から、参加者が多いことがわかります。メニューも豊富で、ぜいたくなこともわかります。しかも、土産としてお持ち帰りもできたので、とても盛大な結婚式だと思いました。



祝樽 桶
(三木家資料)

三木家婚礼資料にみる松岡家との交流

福崎町で有名な柳田國男が婚礼に関わっていて驚きました。

庸一よういちの結婚披露宴は、東京だけでなく四・五日も続くという事に驚きました。そこには四・五日も続くほど披露するものが多かったのかもしれない。けれど、とても疲れると思いました。すごい体力！

●明治期の福崎の婚礼

役場に行ったときに見せていただいた資料に明治期の福崎の婚礼について書いてありました。



明治150年記念 特別展
パンフレット「明治の福崎」

花嫁行列や花嫁衣装などの嫁入り道具を運ぶ列は見物人もたくさんいて、歌をうたったりしてとてもにぎやかだったと考えられます。

さまざまな嫁入り道具も人が運んでいました。今では嫁入り道具という言葉は聞かないし、20代の結婚式をした親戚のお姉ちゃんも、嫁入り道具なんて持っていかなかったと言っていました。結婚が本人のもの

というよりは家としての一大イベントとしてとらえられていることが分かると思いました。

柳田國男は、幼い頃、辻川で婚礼の様子を見たことがあると言っています。その様子は明治時代の象徴ととらえていることがわかります。身分が高い人だけでなく、一般の人々も同じような婚礼を挙げるようになっていったと思われれます。



嫁入り道具を運ぶ長持
「明治の福崎」より引用

辻川区の家に配られた『民俗学のふるさと辻川』には、辻川で再現された花嫁行列のことが紹介されていました。

辻川区の人が協力して歴史の変化を伝え残そうとする様子がすごいと思います。私も機会があったら参加してみたいです。



資料の表紙にも婚礼の様子が描かれています

柳田國男は二回結婚式の男蝶おちようをつとめています。儀式が非常に面倒くさいと言っているし、儀式の様を読むと堅苦しい感じがしました。今とは全然違うなあと思いました。

●最後に・・・

結婚式をたどっていくことで、その時代の考え方にふれることができました。今しか知らないのはどんなことでもさみしいことだと思えます。昔があるからこそ今の私たちがいるので、昔をたどることで今を大切に生きようと思うことができるからです。

今では考えられないようなならわしもありますが、昔から今まで共通しているのは幸せなスタートを周りがサポートし応援している姿であり、新しい生活に向かう決意が結婚式の形なんだなあと思いました。

最新版『福崎町指定文化財マップ』を作成しました!!

文化協会では、文化財をとおして郷土愛を育み、地域の活性化に役立てていただくことを願い「福崎町指定文化財マップ」を作成しました。

古くから交通の要衝として栄え、周囲を緑の山に囲まれ、中央を市川が流れる福崎町。町には先人たちが遺した文化財が数多く存在しています。

ぜひ、マップを片手に町内を散策し、これまで気づかなかった地域の魅力を探してみてください。

マップは、文化センターのほか、社会教育課、歴史民俗資料館に配置しています。

また、町のホームページでも公開しており、いつでもお持ちのスマートフォン等でご覧いただくことができます。ぜひ、ご活用ください。

問い合わせ先 社会教育課

☎ 22・0560(257)



福崎町文化協会 お知らせ

令和7年5月17日、福崎町文化協会と福崎町公民館クラブ連絡協議会を統合した、新しい福崎町文化協会が誕生し、設立総会をエルデホールで開催しました。

旧福崎町文化協会は、昭和61年に設立しました。他市町の文化協会のほとんどが、趣味特技を同じくする人たちが結ばれた各種団体の連合体となつていますが、福崎町の文化協会は、福崎町が柳田國男生誕地であることから、主に柳田國男や松岡家の顕彰に努めてきたという特徴があります。柳田國男や国文学者で歌人の次兄、井上通泰を顕彰する「短歌祭」、日本画の大家で末弟の松岡映丘を顕彰する「写生大会」、そのほか、「ふるさと文化祭」などの活動も行ってきました。

一方、公民館クラブ連絡協議会は、昭和46年の文化センター開館のころ、すでに14クラブが活動を始めていました。その後長きにわたり「発表会」、「福崎秋まつりでの展示」、「八千種研修センターまつり」など、文化の向上・発展に尽くし、各種の文化活動の発展とクラブ活動の充実に努めてきました。

しかしながら、近年では、両団体とも会員数の減少が顕著となり、また、高齢化も避けられない問題となってきました。

そこで他市町の文化協会を参考に、公民館クラブ連絡協議会との協議を重ねた結果、両団体が統合し、新たな文化協会として生まれ変わることとなりました。当面は、両団体が行っていた各種の事業はそのまま継続して行っていきます。

これからも引き続き、町の文化の振興に取り組んでまいります。ご支援・ご指導よろしくお願いいたします。



柳田國男とその兄弟

公民館クラブ会員募集

町には住民の教養の向上、健康の増進、生活文化の振興、社会福祉の増進を目的とした社会教育法に基づき公民館が2つあります。一つは中央公民館として文化センターがあり、もう一つは分館として八千種研修センターがあります。この両施設や地域の公民館などを利用して住民が生涯を通じて趣味や教養に自主的に取り組み多くの団体が活動されています。

現在、コーラス、吹奏楽、書道、ちぎり絵、パッチワーク、パソコン、短歌、俳句、英会話、中国語教室、将棋、囲碁など、多数のクラブが活動され、定期的に公民館で発表されています。

各クラブは、それぞれで会員を募集しています。知識・技術を習得したい、その成果を地域へ還元したい、活動を通じて友人を増やしたい、等と思われる方は是非、挑戦してください。

また、新たにクラブを作って活動したい方も要件さえ満たせば、文化センターなどの施設を有利な条件で利用できます。是非お問い合わせください。



問い合わせ先 福崎町文化協会事務局
(文化センター内) 22-3755

第四十四回

福崎町美術展作品募集

第四十四回福崎町美術展(公募展)の作品を募集します。

皆様方のご応募を心よりお待ちしております。

会期 令和八年

六月十二日(金)～

六月十四日(日)

会場 福崎町エルデホール

主催 福崎町・福崎町教育委員会

部門 日本画・洋画・書・写真・彫
塑工芸

応募は一部門一人一点、未発表の作品に限る。

作品搬入 令和八年

六月六日(土)

午前九時～午後四時

審査員

日本画 水田 陽子

洋画 三浦 孝宣

書 池永 碧濤

写真 森井 禎紹

彫塑・工芸 山本 喜容子

山桃忌奉賛

第四十一回短歌祭作品募集

柳田國男先生と井上通泰先生の命日にちなみ、両先生を偲ぶ会として、毎年八月に柳田國男・松岡家記念館により山桃忌が行われています。

短歌祭は文化協会と福崎短歌会により、山桃忌の当日に行っています。

本年の短歌祭は、左記の要領で作品を募集します。

日時 令和八年八月二日(日)

場所 福崎町文化センター

主催 福崎町文化協会・福崎短歌会

作品 未発表のもの・一人二首以内

応募料 一首につき五百円

要領 原稿用紙に楷書で縦書き

宛先 福崎町文化センター内
文化協会事務局 宛
締切 令和八年六月三十日(火)

表紙の写真

表紙の写真は、国登録有形文化財、旧辻川郵便局です。大正12年に三木家9代当主・拙二により建てられ、電信電話局の役割もしていました。平成31年に三木家の西隣から東隣の現在の場所に移築されました。現在は「NIPPONIA播磨福崎蔵書の館」の一部として、1階はブックカフェ、2階は客室として利用されています。



編集後記

たくさんの方々のご協力により福崎町文化第四十二号を発刊することができました。寄稿いただいた皆様、校正等にご協力いただいた皆様に厚くお礼申し上げます。